

タキイのエンドウ栽培マニュアル

地域		月	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	
冷涼地	春まき	(スナップエンドウ・キヌサヤエンドウ)												
					ポット育苗			×			—			—
中間地	暖地	(スナップエンドウ・実エンドウ・キヌサヤエンドウ)												
		●			●			—			—			—

適期表記号説明

- : タネまき
- : 育苗期
- × : 定植
- : 生育期
- : 収穫期
- : スナップエンドウ収穫期
- : 適宜播種可能

エンドウの発芽

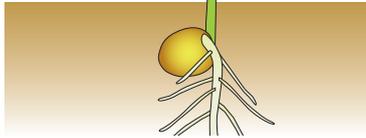
発芽適温 18~20℃ (発芽は4℃以上ではじまる。10℃程度の低温でも発芽日数は長くなるが比較的発芽率は高い)

開花から収穫期までが、できるだけ長く適温期間になるように播種する時期を決めます。秋まき栽培で播種期が早いと厳冬期まで生育が進みすぎてしまい寒さによる障害が、反対に遅いと初夏に気温(25℃以上)が高くなって急につるが枯れ上り、収穫時期が短くなってしまいます。

エンドウをはじめマメ類のタネを水に浸してから播種すると、急激な吸収によって種皮が破れて発芽を損ねる場合があります。水に浸さずタネをまくようにしましょう。

エンドウの発芽

適温であれば5日ぐらいで発芽する

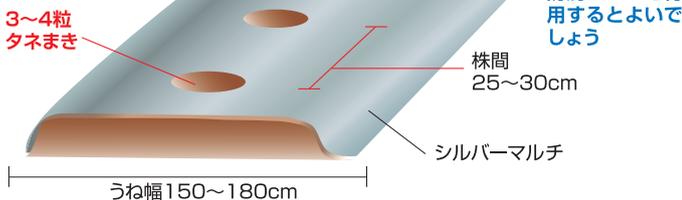


エンドウの発芽

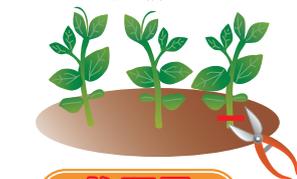
エンドウの播種

エンドウは気温の低下する秋に播種し、耐寒性の強い幼苗で冬を越すようにします。播種の目安は、一般地の露地栽培では10月中旬から11月中旬になります。マルチは雑草を抑え、水分と肥料分を保持する働きがあるのでぜひ利用するようにしましょう。

エンドウの根は過温に弱いので高うねにする



鳥害防止に播種後、不織布をベタがけしたり、防鳥テープを利用するとよいでしょう



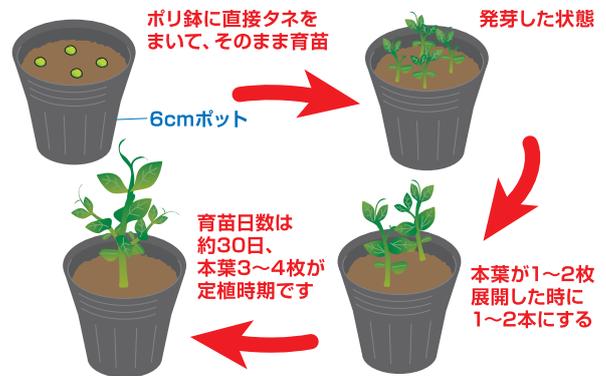
欠株を防ぐため1穴に3~4粒播種し、本葉が2枚くらいまでに1~2本に間引きします。生育のよいものを残してそのほかの株は根元をハサミで切り取ります。

施肥量

元肥は目安として10㎡当たり成分量で、チッソ70~100g、リン酸100~150g、カリ100~150gを施用します。実エンドウは、栽培期間が長いのでチッソ120g程度とやや多めに施します。元肥には肥効が長い有機質肥料などを使うとよいでしょう。

エンドウのポット育苗

マメ類は播種後から発芽までの間、鳥害が多いので育苗して定植するのもよいでしょう。育苗期間が1カ月程度なので6cmポットにまきます。大きくなってから定植すると活着が悪くなるので、本葉3~4枚ぐらいになったら、根鉢をくずさないように定植します。



ポリ鉢に直接タネをまいて、そのまま育苗

発芽した状態

6cmポット

育苗日数は約30日、本葉3~4枚が定植時期です

本葉が1~2枚展開した時に1~2本にする

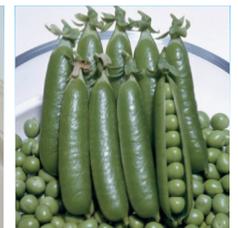
エンドウの種類



絹莢エンドウ



スナップエンドウ



実とりエンドウ

分類	莢の形状	代表品種
莢エンドウ	大莢種	仏国大莢
	絹莢種	成駒三十日
	スナップ種	スナック、グルメ
実エンドウ	糖質型	南海緑、久留米豊
	中間型	ウスイ
	でんぶん質型	滋賀改良白花1号

エンドウの品種には、大きく分けて絹莢エンドウ、スナップエンドウ、実とりエンドウの3種類があります。つる性の植物ですが、草丈によって高性、矮性、半矮性に分類され、花卉の色は白、赤、紫色などがあります。

エンドウの越冬

●越冬について

本葉2~3枚ごろが最も耐寒性が強く、幼苗は-7℃ぐらいの低温に耐えることができますが、越冬時に生育が進みすぎると寒害を受けやすくなります。大きくなりすぎた場合はしっかり防寒対策をしてください。エンドウは、一部の品種を除き生育初期、一定の低温にあわないと花芽ができません。

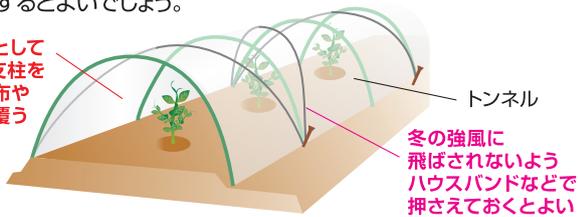


エンドウの幼苗

越冬方法と追肥

適期に播種したもので、直接霜にあたりと傷みやよくなるので、株の上に笹の枝やワラをかぶせて霜よけします。また寒さが厳しくなる12月下旬まで、トンネル支柱に不織布や寒冷紗をかけると防寒対策になります。冬は風が強いので、被覆資材が飛ばされないようハウスバンドなどで補強するとよいでしょう。

防寒対策としてトンネル支柱を使い不織布や寒冷紗で覆う



収穫時期の長い絹莢エンドウは、土寄せのころ、開花期、収穫始めのころにそれぞれ1回ずつ追肥しますが、実エンドウとスナップエンドウでは、着莢肥大期に1回程度草勢を見ながら、中耕・除草・土寄せを兼ねて行います。チッソ成分で10㎡当たり30g程度、速効性の化成肥料を追肥します。

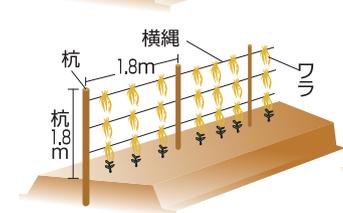
追肥

2月中旬までにうねの肩に、速効性肥料を施す同時に株元へ、土寄せも行う。



支柱立て

支柱立て



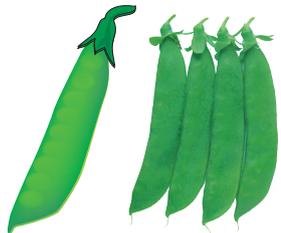
エンドウネットやキュウリネットを使う

開花期に土壌が乾燥しすぎると、落花が増えます。着莢率と秀品率を向上させるためには、乾燥が続く時に灌水するとよいでしょう。液肥を利用すると品質のよい莢が収穫できます。

収穫

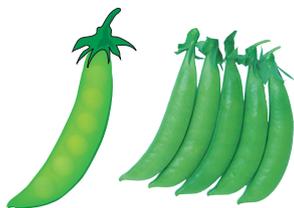
絹莢エンドウ

収穫→



莢の中の子実が少しふくらみ始めたころに収穫します。

スナップエンドウ

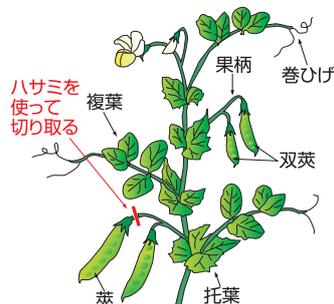


子実が十分ふくらんで、莢が鮮やかな緑色になってきたころに収穫。莢ごと食べられます。

実とりエンドウ



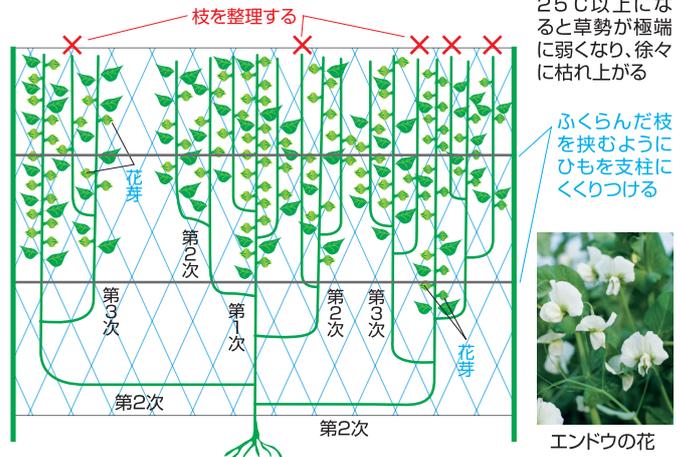
中の子実がふくらんで莢にしわが現れ始めたころに収穫します。いずれもとり遅れると硬くなるので、若莢での収穫を心掛けます。



整枝と誘引



エンドウの整枝



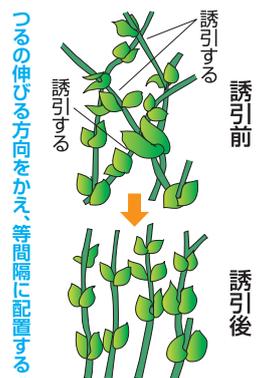
【整枝】

エンドウの着果は第1次分枝(第1回に枝分かれた枝)に多く、第2次、第3次は着果が少なく、高温期に入るのでよい莢がつかないので、3月下旬頃までに出た分枝(側枝)を残し、それ以降に分かれた枝や花つきの悪い枝は、誘引のときに取り除きます。

【誘引】

日照不足によって結実不良を起こしやすくなるので、十分に光が当たるようにするの整枝と誘引をすると受光状態がよくなります。莖は中空なので折れやすく注意が必要です。

エンドウの誘引



エンドウの病害虫

【ハモグリバエ】

3~5月に発生が多く、ハモグリバエの幼虫が葉内に潜って葉肉を食べ進み、幅1~2ミリの白い筋をつけるためエカキムシとも呼ばれます。葉内では葉裏側を食べるため、葉表より葉裏の方が目立つように見えます。多発すると葉全体や莢が白い筋だらけになり、生育が遅れたり、莢の数が少なくなります。葉内の幼虫には殺虫剤の効果が低いので、葉に白い筋が付き始めるころに農薬を散布します。



↑ハモグリバエの被害葉

【うどんこ病】

春先に気温が上昇し生育が進むと、葉全体が白色の粉を振りかけたようになるうどんこ病が発生する場合があります。病気が発生するとなかなか防除できないので、定期的に薬剤散布を行なって予防するとよいでしょう。密植や過繁茂・日照不足・乾燥した条件下で発生が多くなります。



↑うどんこ病

連作障害

エンドウなどのマメ類は、連作を極端に嫌うため3~5年以上あけて栽培するようにします。連作をするといや地現象のため立枯病などが発生しやすくなり、前年より生育が極端に悪くなり収量が激減します。